

命をいただき 感謝する収穫祭

前回の校長だより（第 42 号）で『収穫祭』の名称についてこれまでの変遷についてお伝えしました。総合学科の生徒が半数を占めながら、『収穫祭』という名称を継承していくのは多少の無理があるという意見もありながら、今なお『収穫祭』という名称で、本校では毎年 11 月 23 日に行われているといった内容です。確かに、高校が行う学校祭的な行事の名称は、その高校名や略称であったり、単純に学園祭とか文化祭にしたり、高校の教育上の特徴を表す表記がなされることが一般的です。本県で同じように農業を学んでいる出雲農林高校は「農業祭」、邇摩高校は「文化祭」、矢上高校は全校で行う「学園祭」に加え、産業技術科は「産業祭」を開催し、益田翔陽高校は「翔陽祭」という呼び方で、多くの地域の皆さんに学校を開放して行われています。さらに、松商だんだんフェスタや出商デパートのように商業科では仮想会社を設立し体験的に商業活動を学び、地域の皆さんを巻き込んだ学校祭が行われています。

話を本校の『収穫祭』に戻すと、以前は全ての生徒が農産物を品評会に出品したりしていたためこの名称で違和感がなかったのですが、実際に収穫ということから少し離れた教育活動を行っている学科もあることから、名称変更という議論になるのだらうと思います。「松農祭」とか「松農フェスティバル」になるとこの違和感も少しは和らぐのではないかと思います。私は『収穫祭』という名称でいいのではないかと考えています。

皆さんは、“収穫”という言葉から何を連想するでしょうか、イネを刈り取り調整して米をたくさんとること、畑から大きな大根やサツマイモを引き抜くこと、植物体からトウモロコシを採ったり、木になっているミカンやリンゴを採ること・・・など様々だろうと思います。ただ、この収穫という行動には共通してこれまで生命活動を行っていた植物の生命源を断つという行動があります。根から吸収していた養分や水分が収穫することによって断たれるわけです。私たちはその葉や茎・根などの植物体を食べます。命あるものを私たちの命をつなぐために食べるわけです。ですから、食事の前には「いただきます」といって食べます。これは日本独特の食文化で、食材に対する感謝の思いを表したものだといわれています。本校では植物を育て、収穫を体験する事のない学びをしている生徒も確かにいますが、今でも、そしてこれからも消費者として必ず命ある食べ物と関わっていきますので、農林高校で学ぶ生徒にとっては、農業で生産される農畜産品や加工品に感謝する日が年に 1 回はあってもいいと思っています。その収穫に感謝する、植物の命をいただいて私の命に代えることに感謝する、そういった意味で『収穫祭』という名称は価値あるものだと思います。そして、11 月 23 日は国民が勤労を尊び、生産を祝い、国民互いに感謝しあう勤労感謝の日です。この日は、神様に命の糧を授けていただいた事に対する神への感謝を捧げるための祭りという「日本の収穫祭の日」です。私たちの命をつないでくれる食べものに感謝し、私たちを成長させてくれる農業や、私たちを支えてくださる多くの人に感謝するという気持ちがこの収穫祭に込められていなければならないと感じています。

繰り返しになりますが、収穫は植物や動物そのものの命を奪い、それを食べることで私たち人間が活かされているということ。これが、“いただきます”という言葉で感謝の意を表し、祭りはその命をいただくということを悲しいということにしないで、植物などの命を人間の命として、生きるというキーワードでつながっていくのを祝うのではないかと考えています。

農業は、命を育て、命をつなぐ仕事であるということを理解している消費者として、生徒が育ってくれることへの思いも『収穫祭』という名称には込められているのではないかと考えています。

